

— 1年・渡部実践 —

— 「学びのものさし」の外にある学び—

「ようちえんのともだちと いっしょにあそぼう」は複合的な単元である。まず遊びの単元として、学習指導要領では「(6) 身近にある物を使って遊ぶ活動を通して、遊びや遊びに使う物を工夫し、面白さや不思議さに気付くとともに、みんなと楽しみながら遊びを創り出す(抜粋)」にあたる。同時に、幼稚園児との交流は「(8) 身近な人々と伝え合う活動を通して、相手のことを想像したり伝えたいことや伝え方を選んだり、関わることの楽しさが分かり、進んで触れ合い交流しようとする(抜粋)」ことも併せる。つまり「楽しさ」を共通項にして、「**遊びの工夫**(作ったり遊び方を工夫したりして、楽しく過ごす)」と「**情報と交流**(様々な手段で伝え合い、身近な人々と関わり交流する)」の二つの視点を内包する。授業づくりでは、子どもたちがこれらの視点を混同しないように単元を二部構成にして、前半は子どもたち自身が創った遊びを楽しみ尽くせるようにし、後半になって園児を招待する企画を提示することが多い。対して本単元では、最初に園児を招待する目標を掲げ、相手意識をもった工夫を「学びのものさし」としてホワイトボードに明示し続けた。この手だてにより、1Cの子たちにとってはおもてなしが最優先となり、遊びは園児たちを楽しんでもらう場であり道具となった。「どうしたら年長さんたちが楽しめるか？」に傾注し、「UFO キャッチャー」、「おまつりマウンテン」などのお店に加え、クイズやくじ引きなどイベントも企画し、園児たちに招待状も送った。それでも「説明分かりやすいかな？」とか「時間足りるかな？」と心配し、ゲストティーチャーで来た年長組の担任の先生に、園児たちのふだんの様子や何をして遊んでいるか熱心に尋ねた。

遊びの単元では「自分が楽しめて、相手も楽しめる」や「相手が楽しめて、自分も楽しい」が理想だが、1Cの子どもたちの活動に一貫していたのは緊張感だった。例外は「1C かんとうかい」で、準備のときはいつも「どっこいしょ！」の掛け声とともに太鼓を打ち鳴らして竿燈を掲げ、ふらついて他のグループにぶつかりそうになるなど、型にはまらず自分たちの遊びを心底楽しんでいて、ところが相手意識が置き去りで、本時の「お試し交流会」では声もかけられず、太鼓も叩けず、ただ立ち尽くすだけだった。それまで最も楽しんでいたグループが、本時で壁につき当たったのだ。ただ、むしろこのプロセスが必要で、本時の苦い体験が問題意識を喚起し、翌週の本番では年長さんも自分たちも一緒に竿燈を楽しむ、に到達できた。

学びの目標や型を子どもたちに示せば活動を統一しやすいが、ある種の義務として作用し遊びの自由さと楽しみを制限してしまう。それでも、視点をもっと広げると本単元の別の価値が見える。年長組の先生の話によると「年長さんは初めて附小の校舎に入り、教室に入った途端に緊張した顔だった。でも、1年生に優しく遊び方を教えてもらい『いいね』、『上手』と褒められ、自由に遊べて安心して楽しめた。帰りに1年生がテラスに出て来てお見送りをしてくれると、嬉しそうに手を振り返っていた。5ヶ月後の3月、園児たち自身で卒園前のパーティーをしたいという話になった。お店屋さんやコンサートをして、年少さんや年中さんに来て欲しいと。無事パーティーを終えた後、『大変だった』という声があったが、担任が『附小の1年生もみんなを頑張って招待してくれたんだね』と伝えると、ハッとした表情になった」という。1年生の熱意と細やかな気遣いが伝わったから、年長さんも年下の子たちに同じようにしてあげたい気持ちが湧いたのだろう。こうした学年・校園を超えた学びの継承は、単元内のものさしでは測定の対象にならない。しかし、これが附小で実践する生活科の独創的意義に違いない。